

(英語版)

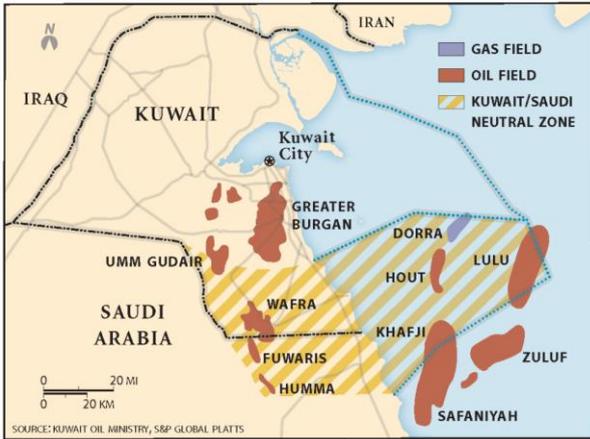
(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年 (百九十)

エピローグ(二)

百九十 東と東の遭遇(二―四)



クウェイトとサウジアラビアの国境地帯で操業していた日本の石油開発会社で働く三人のアラブ人たちも決断を迫られた。ヨルダン人のカティーブはパレスチナ人のザハラを誘って、実家のあるアンマンに帰ることにした。出稼ぎ中に貯めた資金を元手にカティーブはアパート経営を、ザハラは自動車修理工場を立ち上げるつもりであった。残るもう一人のパレスチナ人シャティーラは米国で働く弟を頼って移り住むことにした。東へ東へと向かっていたパレスチナ人たちは、一転して西へと移動し始めた。

ある一夜、日本人の同僚が三人のために送別会を開いてくれた。日本人専用の社宅のためサウジアラビアでは御法度のアルコールもふるまわれ一同は思い出話にふけた。勤務年数は最も長いシャティーラで三十年、カティーブでも二十一年に達し人生の壮年期を日本企業で働いたことになる。出稼ぎ者の彼らがこれほど長く一つの会社に勤めることは珍しい。普通のクウェイトやサウジの企業であれば、オーナーの気まぐれで首になったり、或いはオーナーの横暴に耐えかねて転職していたに違いない。しかし日本人の会社は落ち着いて働ける会社であり、職場環境は居心地が良かった。政府と会社の利便性は、彼らはできればその時まで働き続けたいと思っていた。しかし歴史に振り回されて

きた。パレスチナ人は今回の国外追放も運命の一つとして淡々と受け入れたのであった。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: Arehakahazuyai@gmail.com